

～昭和30年代の上尾～

昭和33年7月15日に市制施行した上尾市は、昨年市制施行60周年を迎えました。平成30年4月号から平成31年3月号までの上尾歴史散歩は、昭和30年代当時の広報誌『上尾自治だより』から、当時の出来事やその背景などを探ります。

電報電話局の開設

電話は現代社会のコミュニケーション手段として、欠くことのできない存在である。しかし、平成29(2017)年度末のNTT東・西日本の固定電話の契約数は1,987万件で、ピークだった平成9(1997)年度の約3分の1以下になったという(平成30年6月5日付『日刊工業新聞』ホームページ)。携帯電話などの普及により、固定電話の必要性が薄れていくのは時代の流れであろう。

しかし、かつて電話は貴重なものであった。一般用の電話は、埼玉県では明治35(1902)年12月に、川口郵便局(川口市)に電話所が設置されたのが始まり



写真1 電報電話局の開設と電話の自動化を伝える『上尾自治だより』(第106号)

である。翌明治36(1903)年2月には、浦和郵便局(さいたま市)にも電話所が設けられた。上尾町では、大正2(1913)年に特設電話組合が結成され、翌大正3(1914)年12月、郵便局内に公衆電話が開設された。そして、大正4(1915)年12月、郵便局内に交換室が設置され、電話が開通した。

当時の電話は、その都度交換手を呼び出して手動で回線を接続するものであった。埼玉県では、昭和9(1934)年3月に川口局が、次いで翌昭和10(1935)年3月に浦和局が自動化されたが、その後戦時体制下に入ったため、自動化は中断した。

戦後、電話の加入希望者は増加し、対応が追いつかない状態であった。そのため、電話不足への対応と農業関係の情報などの広報を目的に、各農業協同組合が共同で放送農業協同組合を設立し、有線放送を開始した。

上尾市では、まず大石・平方・大谷の各農協が共同で、昭和35(1960)年9月から有線放送を開始した。開始当初の加入者数は、大石農協64世帯、平方農協310世帯、大谷農協385世帯であった。また、昭和37(1962)年10月からは、上尾・原

市・上平の各農協も共同で有線放送を開始した。開始当初の加入者数は、上尾農協511世帯・原市農協336世帯・上平農協481世帯であった。交換手を呼び出して相手に接続してもらう形ではあったが、放送の合間には加入者間の通話が可能であり、市内や市外の一般電話へ接続することができた。

高度経済成長期に入ると、電話の需要は一層高まり、農協の有線放送による手動の交換では対応しきれなくなると、急速に自動化を進める必要が生じた。そこで、それまで上尾郵便局の一角で業務を行っていた日本電信電話公社(電電公社)は、緑丘に独立した電報電話局の局舎を建設し、昭和39(1964)年4月29日から電話の自動化を開始した(写真1・2・3)。この時、上尾局の市内局番は71、市外局番は0487と決められた。

自動化直前の市内の電話加入数は2,058本であったが、5年後の昭和44(1969)年には1万本、約10年後の昭和50(1975)年には4万本に増加した。当時の市の人口増加に比例して、電話も急速に普及していったことが分かる。

(上尾市歴史民俗研究会)



写真3 完成した電報電話局の局舎



写真2 電電公社が業務を行っていた上尾郵便局